

英語母語上級日本語学習者の話し言葉における 助詞の脱落について

Particle omissions in spoken language by advanced learners of Japanese with English L1 background

小森早江子*

1. はじめに

本研究は英語を母語とする上級日本語学習者の発話データをもとに、助詞の使用について、話し言葉でよくみられる助詞脱落の特徴を明らかにすることを目的とする。日本語学習者は、日本語母語話者と同じように助詞を使用したり、脱落したりするのかどうかを明らかにするために、学習者と母語話者の話し言葉のデータを分析する。

2. 先行研究

まず、学習者の助詞習得と母語話者の助詞使用に関する研究を簡単に概観する。

2.1 学習者の助詞習得に関する研究

日本語学習者の助詞の習得に関しては、1980年代後半からに盛んに調査研究が実施された (Banno and Komori, 1989; 佐藤, 1999; Yagi, 1992 など)。この時期の研究の多くは、誤用分析の流れから、学習者の作文・発話あるいは穴埋め問題などの中に表われた助詞の正用と誤用から、正用率 (あるいは誤用率) を算出して、学習者間の助詞習得の難易度に基づいて習得順序を比較するものであった。その結果、研究方法により違いもあるが、正用率をもとにして判断すると、概ね「ハ」の習得が早く、続いて「ヲ」、それから「ガ」という順に習得が進むこと、また同じ「ガ」でも、目的語の「ガ」が先で、主語の「ガ」があとに習得さ

* 人文学部教授 第二言語習得, 日本語教育

れることなどが報告された。

例えば、佐藤（1999）は、初級から中級までの3つのレベルの英語母語日本語学習者12人の Oral Proficiency Interview（OPI）データを使って、助詞の習得を分析した。その結果、学習者の助詞使用の割合は、レベルの上昇に伴って母語話者の割合に近づくと報告している（佐藤，1999，p.42）。

佐藤（1999）をはじめ、これまでに報告のある多くの研究は、初級から中級レベルの学習者の研究が中心である（Banno and Komori, 1989; Doi and Yoshioka, 1990; Yagi, 1992）。レベルが上がるにつれて母語話者の使用に近づくと考えられるが、上級学習者については、詳しい研究報告が少なく、母語話者との違いは詳しくはわかっていない。

2.2 母語話者の助詞使用に関する実態調査

日本語母語話者について丸山（2015）は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）における助詞の使用実態に関する調査を実施し、助詞の使用比率を報告している。それによると BCCWJ のコア（新聞、雑誌、書籍、白書、知恵袋、ブログ）すべて（短単位 1,098,511 語）を対象に格助詞の使用について調べた結果、「ノ」は 55,654 回、「ニ」は 37,064 回、「ヲ」は 33,321 回、「ガ」は 25,545 回、「ト」は 22,668 回使われていた。係助詞については「ハ」が最も多く、31,634 回であった。格助詞の「ニ」および「ト」は、「により」「における」「として」などの複合語としての使用が多い。

また、三原・平岩（2006）は日本語の統語分析の中で、格助詞脱落に関して、「脱落が起こるのは基本的に『ガ』と『ヲ』に特化しており、そのほかの格助詞を落とすと非文法が生じる。」（p.19）と指摘している。

3. 研究課題

先行研究より、初級から中級までは佐藤（1999）が分析し、日本語習得レベルが上がるに伴って助詞の誤用率は減少し、助詞の使用傾向は母語話者に近づく、という結論を得ている。しかし、上級学習者について助詞の使用が母語話者と同じようになるかどうかは明らかになっていない。今回は、上級日本語学習者と母語話者の「大学生雑談データ」（非公開）を対象として、助詞の使用と脱落（省略）にタグを付けて、頻度を比較する。「大学生雑談データ」は、日本語研究・日本語教育研究のために収集している日本語学習者と母語話者の自然発話データである。「大学生雑談データ」の収集は 2017 年に開始し現在も継続中である。今回分析対象としたデータは、2 人 1 組でおこなった雑談 10 データ（短単位総語数 31,629 語）である。日本の大学に留学中の学習者と日本人大学生に依頼して、30 分程度の雑談を

おこなってもらったものである。学習者には、複数の異なる日本人大学生と別々に雑談をしてもらった。また日本人大学生にも日本人同士の雑談をしてもらった。データについてはつぎの章で詳しく紹介する。録音したデータは書き起こしてデータ化し、コーパス分析システム Co-Chu に取り込んで分析をおこなった⁽¹⁾。自然発話にみられる助詞の使用と脱落は、英語を母語とする上級日本語学習者と日本語母語話者を比べてどのような共通点や相違点があるのか、初対面と友人同士などの条件での違いについても比較する。それを踏まえて、機能語としての助詞の使用および脱落について特徴を分析する。

調査対象とする助詞については、今回分析対象とする 10 の発話データに表れた助詞について使用頻度の上位のものと、丸山 (2015) の母語話者データ (BCCWJ) における助詞の使用実態に関する調査で上位にあがったものを参考に格助詞の「ニ」「ガ」「デ」「ヲ」と係助詞の「ハ」「モ」の 6 つを選定した。さらに、三原・平岩 (2006) で指摘されている、統語面で文の主体と対象という文中の主要な役割を示す格助詞の「ガ」と「ヲ」について詳しく分析する。

本研究の具体的な研究課題は、以下の 2 点である。

研究課題 1：英語母語上級日本語学習者は日本語母語話者と同様に助詞を使用・脱落するか。

研究課題 2：英語母語上級日本語学習者および日本語母語話者の助詞「ガ」と「ヲ」の使用と脱落の特徴は何か。

4. 分析対象データ

本研究で使用する話し言葉データ「大学生雑談データ」には以下の (A) と (B) がある。

(A) 大学生雑談：上級学習者と母語話者の会話（データ 1～7）

(B) 大学生雑談：母語話者と母語話者の会話（データ 8～10）

(A) は初対面の学習者 1 人と母語話者 1 人が雑談をおこなったもので、データ 1～7 まで 7 つある。(A) の学習者はすべて英語母語話者で日本に留学中の大学院生 (アメリカ人) 3 人である。この 3 人は、表 1 のデータ 1～7 の話者 1 の列にイニシャルで記載した。同じ学習者が 3 人の日本人大学生と雑談をおこなったため、データ 1～3 と 4～6 は、それぞれ同一の学習者である。(B) は、母語話者である日本人大学生 1 人が、友人 3 人と別々に雑談したものである。データ 8～10 の話者 1 の列の日本人大学生 N がその友人 3 人 (D, I, F)

と別々に会話した3つのデータである。いずれも雑談データは30分～50分程度の会話を書き起こして文字化したものである。ライン数は、文字起こししたときの発話の数、短単位語数はトークン数、短単位異なり語数はタイプ数である。

表1 「大学生雑談データ」と被験者情報

種類	データ番号	話者1	話者2	データ(分)	ライン数	短単位延べ語数	短単位異なり語数
A	1	英語母語J	日本人大学生K	約39分	323	3,911	709
	2	英語母語J	日本人大学生N	約49分	502	5,681	885
	3	英語母語J	日本人大学生Y	約45分	599	5,766	884
	4	英語母語M	日本人大学生R	約45分	531	4,062	703
	5	英語母語M	日本人大学生A	約44分	440	4,160	727
	6	英語母語M	日本人大学生H	約48分	486	3,945	702
	7	英語母語S	日本人大学生A	約54分	641	4,104	750
B	8	日本人大学生N	日本人大学生D	約41分	323	2,207	534
	9	日本人大学生N	日本人大学生I	約30分	109	1,065	281
	10	日本人大学生N	日本人大学生F	約30分	835	4,529	775

分析は、表1の各データを対象に、コーパス分析システム Co-Chu を使っておこなった。具体的には、発話データごとに助詞脱落の分析タグを付け、コーパス分析システムに取り込み、形態素解析したのちに助詞と助詞脱落の分析タグを検索し、助詞の使用と脱落の頻度を算出した。

5. 「大学生雑談データ」分析と結果

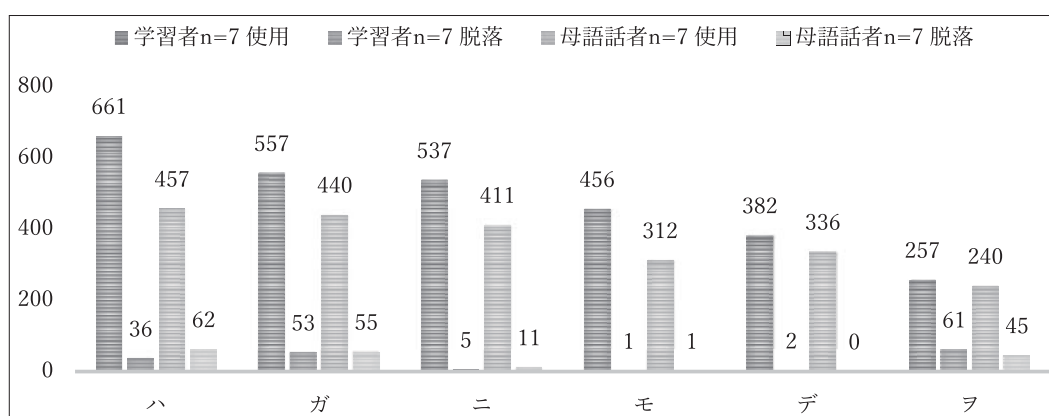
学習者と母語話者の助詞の使用と脱落を調べるために、助詞の使用数と脱落数から脱落率を算出した結果を実例とともにみていく。「大学生雑談データ」のうち、まず(A)の上級学習者と母語話者の会話(データ1～7)を分析し、つぎに(B)の母語話者と母語話者の会話(データ8～10)と比較する。さらに実例をみながら助詞の使用と脱落について考察する。助詞別分析として「ガ」と「ヲ」についても述べる。

5.1 (A) 大学生雑談：上級学習者と母語話者の会話(データ1～7)

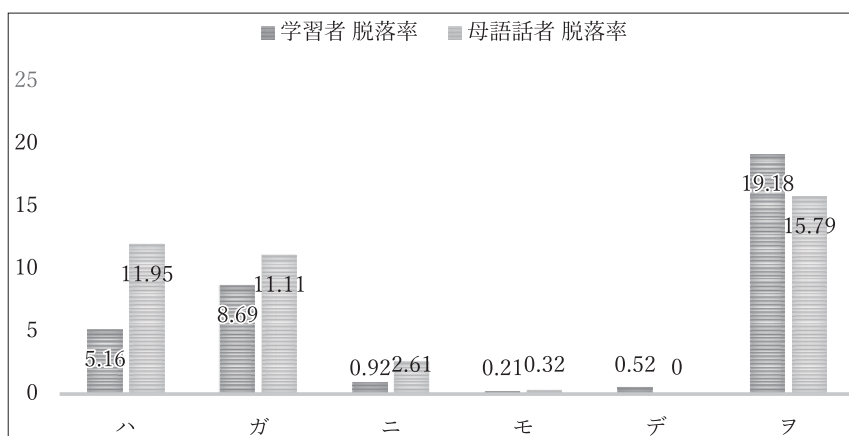
表2にデータ1～7の雑談中に使用された助詞の数と脱落数を示した。グラフ1は使用数と脱落数、グラフ2は脱落率を示したものである。

表2 大学生雑談データ（初対面の接触場面，データ1～7）に表われた助詞の使用と脱落

	学習者 (n=7)			母語話者 (n=7)		
	使用	脱落	脱落率	使用	脱落	脱落率
ハ	661	36	5.16	457	62	11.95
ガ	557	53	8.69	440	55	11.11
ニ	537	5	0.92	411	11	2.61
モ	456	1	0.21	312	1	0.32
デ	382	2	0.52	336	0	0
ヲ	257	61	19.18	240	45	15.79

*脱落率10%以上のところに網掛け⁽²⁾

グラフ1 「大学生雑談データ」の学習者と母語話者の助詞使用数と脱落数の比較



グラフ2 「大学生雑談データ」の学習者と母語話者の助詞脱落率の比較

表2とグラフ1をみると、英語上級日本語学習者の助詞の使用数は、「ハ」「ガ」「ニ」「モ」「デ」「ヲ」の順に多いことがわかる。母語話者については、上位「ハ」「ガ」「ニ」は学習者の場合と同様であったが、その後は「デ」「モ」「ヲ」の順に多かった。つまり「デ」と「モ」の順序が逆転したこと以外は、学習者と母語話者の助詞の使用については同じ傾向であった。この順序の相違について、ウイルコクソン順位和検定をおこなった結果、2つの順位に有意な差はみられなかった（検定統計量 $U = 9.00$ ，期待値 $= 18.00$ ，分散 $= 39.00$ ，検定統計量 $Z = 1.44$ ， $p > 0.10$ ）。一方、日本語学習者の助詞の脱落数は、「ヲ」「ガ」「ハ」の順に脱落が多くみられた。母語話者は「ハ」「ヲ」「ガ」の順で脱落が多かった。脱落数/（使用数+脱落数）で算出した脱落率でみると、学習者は「ヲ」「ガ」「ハ」の順で比率が下がり、「ヲ」脱落が19.18%と目立って多い。学習者も母語話者も「ヲ」脱落が多い。また母語話者は「ヲ」脱落の比率が最も高く（15.79%）、「ハ」脱落（11.95%）、「ガ」脱落（11.11%）と続いている。

前述したように、日本語学習者JとMは、それぞれ3人の異なる日本人大学生と雑談をおこなった（データ1～6）。相手によって助詞の使用数、脱落数、脱落率は違うのであろうか。助詞「ハ」「ガ」「ヲ」についてデータごとに調べたところ、学習者の助詞使用数の多い順に、「ハ」>「ガ」>「ヲ」の順のデータが3つ、「ガ」>「ハ」>「ヲ」が2つ、「ハ」>「ヲ」>「ガ」が1つであった。相手によって、使われる助詞の数に差がみられることがわかる。しかし、脱落率では、6データすべてにおいて、「ヲ」>「ガ」>「ハ」の順であった。つまり、学習者が異なる母語話者と話しても共通して助詞「ヲ」の脱落率が最も高い。この傾向は、母語話者も同様である。同じ6データの日本語母語話者の助詞の使用数は「ガ」>「ハ」>「ヲ」の順のデータが3つ、「ハ」>「ガ」>「ヲ」が2つ、「ガ」>「ハ」>「ヲ」が1つであるが、脱落率は、すべてのデータで「ヲ」>「ハ」>「ガ」の順となった。

さらに「ガ」と「ヲ」のみを比べると特徴は顕著になる。学習者も母語話者も共通して、使用は助詞「ガ」が多く、脱落率は「ヲ」が高い傾向がみられた。

なぜ使用は「ガ」が多く、脱落率は「ヲ」が多いのか、考察してみたい。どのデータでも助詞「ヲ」より助詞「ガ」の使用数が多い理由は、助詞「ガ」の機能に由来すると考えられる。助詞「ガ」は話している内容の焦点となる主語をマークする場合や、強調したい語をマークするときに使われる。このような強調の「ガ」は省略されにくく、結果として使用数が多くなったのではないだろうか。助詞「ヲ」の脱落が多い理由は、文脈でわかるものは省略される傾向にあり、強調したいときには「ヲ」でマークする動作の対象物を「ガ」を使ってマークすることになるためだと考えることができる。

5.2 (B) 大学生雑談：母語話者と母語話者の会話（データ8～10）

同じ人でも相手によって、助詞の使用数と脱落数に違いが表れるのかを調べるために、(A)でおこなった日本人大学生Nと学習者との会話と、(B)でおこなった同じ日本人大学

生Nと友人3人の会話を比較する。Nの助詞使用および脱落は、対学習者の場合と、対友人の場合でどのような違いがあるのか。まず日本人大学生Nが初対面学習者J（データ2）とおこなった雑談と、友人である3人（日本人大学生D, IおよびF, データ8～10）とおこなった雑談の中から具体例をみしてみる。発話（1）は、大学生Nが少し年長の学習者Jと初対面でおこなった会話である。Nは就職活動のときの会社とのやりとりについてJに対して丁寧に説明している。発話（2）は大学生Nと友人である大学生Dとの会話である。ここでは旅行の予約のことを話しているが、友人と方言を交え、打ち解けた会話の様子が窺える。

発話（1）「うん、その一、内定承諾書っていう書類を（はい）、相手の会社に、提出しなきゃいけないってなったときに（そうですね）、はい、その内定承諾書に印鑑を押すのを忘れて提出してしまって（ああー）、はい、それでもう急いで電話して（はい）、すみません、。。。」（データ2 日本人大学生N）

発話（2）「で、俺、それ知らなかったんだけど（うん）、勝手に予約されとっ（笑）、間違えた、勝手に予約してくれて。」（データ8 日本人大学生N）

日本人大学生Nは相手が初対面の日本語学習者であるときには助詞の脱落は少ない一方で、相手が友人のときには「ヲ」脱落、「ガ」脱落、「ハ」脱落が多くみられた。Nの友人3人の発話にも「ヲ」脱落、「ガ」脱落、「ハ」脱落が多くみられた。つまり、相手が日本語学習者のときに助詞を脱落しない傾向がみられた。

表3と表4は、データ2と8～10における日本人大学生Nの発話データの助詞使用と脱落の分析結果である。学習者Jと話しているときと、友人である日本人D, I, Fと話しているときとで助詞の使用と脱落および脱落率に違いがあることがわかる。対学習者Jの数値をみると、大学院生で年長である日本語学習者Jと初対面での会話におけるNの助詞使用は多く、脱落が少ない。それに対して、親しい友人である日本人大学生D, IおよびFにおけるNの発話にみられる数値は、助詞使用は少なく、脱落が多く、脱落率が高い。母語話者の友人との気楽な雑談をしているときには助詞の脱落が多く、またNと3人との雑談データ8～10をまとめた表5からもわかるように友人間の会話では、助詞脱落率が高いといえる。

母語話者は、母語話者と話すときと比べて、学習者と話すときにより多く助詞を脱落するのか、あるいは脱落を避けるのか。日本人大学生Nのデータでは後者となった。日本人大学生Nの場合は、初対面で年上の日本語学習者Jに対して失礼のないよう丁寧に話そうとした結果かもしれない。日本人大学生Nだけの分析データであるため、個人差である可能性も否定できない。同じ条件で、対学習者と対日本人の発話データを増やして検証する必要がある。

表3 日本人大学生 N の学習者との助詞の使用と脱落（データ 2）

データ 2	对学习 者 J		
	使用	脱落	脱落率
ハ	69	5	6.76
ニ	71	1	1.39
ガ	42	3	6.67
デ	57	0	0
モ	41	0	0
ヲ	29	2	6.45

表4 日本人大学生 N の友人との助詞の使用と脱落（データ 8～10）

データ 8～10	対日本人大学生 D			対日本人大学生 I			対日本人大学生 F		
	使用	脱落	脱落率	使用	脱落	脱落率	使用	脱落	脱落率
ハ	14	3	17.65	1	1	4.76	70	29	29.29
ニ	0	0	0	12	0	0	18	6	25.00
ガ	11	2	15.38	15	2	11.76	45	19	29.69
デ	5	0	0	15	0	0	38	0	0
モ	4	0	0	5	0	0	36	1	2.70
ヲ	8	2	20.00	11	2	15.38	20	15	42.86

表5 大学生雑談データ母語話者友人どうしの助詞の使用と脱落（データ 8～10）

	母語話者 n=6		
	使用	脱落	脱落率
ハ	230	54	19.01
ニ	93	18	16.22
ガ	138	34	19.77
デ	115	0	0
モ	96	1	1.03
ヲ	95	50	34.48

5.3 日本人大学生が学習者と話す場合

「大学生雑談データ」の日本人大学生の参加者 6 人の中に、大学で日本語教員養成講座を受講した学生が 4 人いた。この学生たちは、日本語学習者に対する話し方をわかりやすく工

夫したのではないだろうか。

以下にいくつか発話例を挙げて、助詞の使用および脱落の特徴を指摘する。

日本人大学生 K, Y, R および A の 4 人は、録音当時すでに日本語教員養成講座を受講し教育実習を経験していた。日本語学習者と話す場合、わかりやすくするために機能語である助詞を省略して内容語を強調する話し方をするのか、あるいは、文法的により正しい日本語で助詞の省略をしない話し方をするのだろうか。上級レベルの日本語学習者と雑談する場合、母語話者の助詞の使用と脱落について例文をみていく。

以下の例は、データ 1, 3, 7 のものである。3 人は前述したように、いずれも日本人大学生で、話し相手は初対面の大学生より少し年上の大学院留学生（アメリカ人）である。日本人大学生は、学習者に対して丁寧体で話しており、助詞の脱落が少ない。

まず、発話 (3) は日本人大学生 K (女性) の発話の一部である。学習者 J (男性) に地元のお勧めの場所を聞かれて、答えている。「お寺とかが多いので」「お寺をみるなら」など、助詞「ガ」「ヲ」の脱落はせず、わかりやすく完全な文の形で答えようとしている。

発話 (3) 「// お勧めのところ、そうですね、やっぱりお寺とかが(はい)多いので(ほおう)、お寺をみるなら↑(うん)、その長野市の(はい)善光寺っていうところで(はい)、ほかに、」(データ 1 の日本人大学生 K)

つぎの発話 (4) は、日本人大学生 A (男性) が学習者 S (男性) と話しているものである。この例では、「じゃあ」「とか」などを使って、少しくだけた話し方をしているが、「アニメの絵とかのほうは」「ストーリーとかのほうが」というように、「ハ」「ガ」が使われており、助詞の脱落はみられない。

発話 (4) 「じゃあ、アニメの、絵、絵とかのほうは好きですか、何かストーリーとかのほうが好きですか、声とか。」(データ 7 日本人大学生 A)

最後に、発話 (5) は、日本人大学生 Y (男性) と学習者 J (男性) の会話である。ここでも「何かを作るんですね」というように助詞「ヲ」が使われている。

発話 (5) 「自分で釣って、その魚で(はい)、何かを作るんですね。」(データ 3 日本人大学生 Y)

上記の 3 例は、いずれも母語話者が学習者に対して丁寧体で話し、助詞の脱落がなく、「○は○○をする」という主語や目的語に当たる関係を誤解のないように明言する形で話している。このような例から、話し相手が上級者であっても、母語話者は初対面の学習者と話す

とき、助詞の省略を避けるのではないだろうか。

しかし、これらの例で挙げた発話者に助詞の脱落がないわけではない。例えば、発話（6）では日本人大学生 K が教育実習の話題で、

発話（6）「ここを聞いたほうがいいのか、もう生徒、知っていそうだからなって思っ
て。」（データ1の日本人大学生 K）

と言っているが、「もう生徒」のあとの「ガ」が省略されている。このような例はほかの話者にもみられた。したがって、母語話者が初対面の学習者と話す場合に必ず助詞を脱落しないということではない。どのような場合に助詞の脱落が起きやすいのか、また脱落が起きにくいのか、詳しく調べる必要がある。

また、初級学習者との対話場面では、できるだけわかりやすくするために、母語話者が内容語を強調しようとした結果、助詞が脱落することがあると考えることもできる。学習者のレベルや母語話者の知識や考え方によっても話し方が異なる可能性があるため、さらに多くのデータを収集し、話者の意識調査なども収集して分析して確認する必要がある。

5.4 助詞「ガ」と「ヲ」の脱落

表2から表4までで観察したように、どのデータでも脱落率の高かった「ガ」と「ヲ」についてさらに詳しく個別の分析をおこなった。

5.4.1 「ガ」の脱落分析

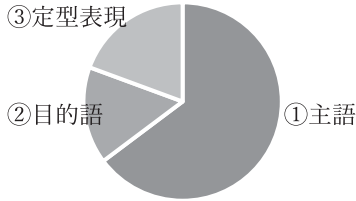
「ガ」脱落のうち、以下の順で多いことがわかった。

1. 主語としての「ガ」の脱落（「地震（が）来たら」など）
2. 目的語としての「ガ」の脱落（「その言葉（が）好きです」など）
3. 定型表現の中に現れる「ガ」の脱落（「～こと（が）ある」など）

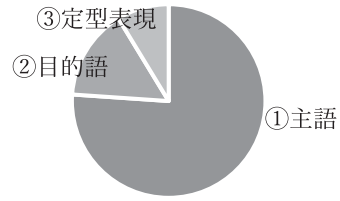
具体的に表6およびグラフ3と4に学習者と母語話者を比較して示す。

表6 「ガ」脱落の比較

	学習者	母語話者
助詞「ガ」脱落数	57	92
①主語としての「ガ」脱落	37 (64.91%)	70 (76.09%)
②目的語としての「ガ」脱落	9 (15.79%)	14 (15.22%)
③定型表現の中の「ガ」脱落	11 (19.30%)	8 (8.70%)



グラフ3 学習者の「ガ」脱落



グラフ4 母語話者の「ガ」脱落

学習者の「ガ」脱落は、全助詞脱落数226例のうち57例あり、①主語としての「ガ」脱落が37例で最も多く、②目的語としての「ガ」脱落と③定型表現の中の「ガ」脱落は、それぞれ9例と11例で比較的少なかった。母語話者は全助詞脱落数397例のうち「ガ」脱落が92例あり、①が70例で最も多く、②と③は、それぞれ14例と8例で少なかった。学習者も母語話者も「ガ」脱落の種類に関して、同様の傾向を示している。学習者と母語話者の3種類の「ガ」の脱落数について順序に有意な差があるかどうか、ウイルコクソン順位和検定をおこなった結果、2つの値に有意な差がなかった（検定統計量 $U = 4.00$ ，期待値 $= 4.50$ ，分散 $= 5.25$ ，検定統計量 $Z = 0.22$ ， $p > 0.10$ ）。しかし、学習者の「～こと（が）ある」などの定型表現における「ガ」脱落は、母語話者より比率（学習者19.30%，母語話者8.70%）が高い。学習者はどのような定型表現で脱落が多いのか、定型表現の使用を詳しくみると、11例中「～こと（が）ある」7例、「～こと（が）ない」3例、「～こと（が）できる」1例であり、「～こと（が）ある」という表現における「ガ」脱落が一番多い。

また、主語としての「ガ」脱落と共起する動詞は、37例中に「～（が）ある」が11例、「～（が）ない」が5例、「～（が）いる」が1例あり、「ある」「ない」が多い。学習者の「～（が）ある」の使用例は9例あり、その中で「山（が）いっぱいあって」のように、「いっぱいある」という表現の使用が5例と半数を超えて使われていた。母語話者では「～（が）ある」の使用は4例と限定的であることから、「いっぱいある」は、学習者が繰り返し使用する言い方であると考えられる。

5.4.2 「ヲ」の脱落分析

「ヲ」脱落分析の結果は表7にまとめた。学習者の「ヲ」脱落は全助詞脱落数226例のうち、77例あった。そのうち①対象としての「ヲ」の脱落（「強い地震（を）感じた」など）は、75例（97.40%）で、②起点としての「ヲ」の脱落（「高校（を）卒業してから」など）は、2例（2.60%）のみ、③通過としての「ヲ」脱落はなかった。一方、母語話者については全助詞脱落数397例のうち、「ヲ」の脱落は118例あり、ほとんどが対象としての「ヲ」脱落（「関西弁（を）使ったり」など）であり、116例（98.31%）あった。この結果から、「ヲ」脱落については、学習者は、母語話者とほぼ同じような傾向であったといえる。

表7 「ヲ」脱落の比較

	学習者	母語話者
助詞「ヲ」脱落総数	77	118
①対象としての「ヲ」脱落	75 (97.40%)	116 (98.31%)
②起点としての「ヲ」脱落	2 (2.60%)	2 (1.69%)
③通過としての「ヲ」脱落	0 (0%)	0 (0%)

また、母語話者の助詞脱落には、以下のような発話がみられる。

発話 (7) 「行きたいね、日本海」(データ 10 日本人大学生 N)

ここで日本人大学生 N は「日本海に行きたいね」を意図していると考えると、助詞「ニ」の脱落と倒置が同時に起きている。この例では、「行きたい」ことを強調しているようにみえる。強調の意味で倒置が起きるとき、助詞は脱落するのか、しないのか。母語話者はどのような場合に助詞脱落と倒置を使うのであろうか。例えば、「食いたいね、リンゴ」は自然であるが、「食いたいね、リンゴを」というと不自然な感じがする。目的語が倒置により文末に置かれる場合は、助詞「ヲ」は脱落される傾向があるのではないだろうか。

6. まとめと今後の課題

本研究では英語を母語とする上級日本語学習者と母語話者がおこなった大学生雑談データを分析した。助詞の使用と脱落について、学習者と母語話者を比較し、以下のような結果を得た。

1) 学習者と母語話者の助詞使用と脱落

研究課題 1 について、英語母語上級日本語学習者は、概ね日本語母語話者と同様に助詞を使用したり、脱落したりする傾向が観察できた。学習者も母語話者も共通して「ガ」の使用が多く、脱落率は「ヲ」が高い。英語上級日本語学習者の助詞の使用は、「ハ」「ガ」「ニ」「モ」「デ」「ヲ」の順に多かった。母語話者は「ハ」「ガ」「ニ」「デ」「モ」「ヲ」の順に多く、「デ」と「モ」の順序が逆転したこと以外は、学習者と母語話者の助詞の使用については共通の順序であった。また、日本語学習者と母語話者の助詞の脱落率について、学習者も母語話者も助詞「ヲ」「ガ」「ハ」の順で低くなり、「ヲ」脱落の比率が目立って高い。

2) 助詞「ガ」と「ヲ」の脱落

研究課題 2 の英語母語上級日本語学習者および日本語母語話者の助詞「ガ」と「ヲ」の個

別分析から、学習者は、母語話者に比べ定型表現における助詞の脱落が多いこと、主語を表すとき「～(が)ある、～(が)ない」など存在の有無を表す場合に「ガ」脱落が目立つことなどがわかった。

3) 学習者と母語話者の共通点

上級日本語学習者および母語話者に共通した特徴は、助詞「ヲ」に比べて「ガ」の使用数が多いが、脱落率でみると助詞「ガ」は会話の中で非常によくの省略される傾向がある。2)で述べたような学習者に多く使われる定型表現もあるが、今回分析対象とした上級日本語学習者は、助詞「ガ」の使用数と助詞「ヲ」の脱落率の点からみると母語話者の使用および脱落の傾向に近いといえる。

今回は、「大学生雑談データ」の延べ20人分(10ペア)の発話データを分析したが、データの種類や数が少ないことにより偏りがある可能性は否定できない。本研究の分析から初対面と友人という発話者間の関係による違いの影響や個人差の影響についても検討が必要であることが指摘できた。量的にも質的にもさらに多くのデータを収集し、検証する必要がある。また、助詞の脱落と倒置との関連について今回発見された問題もある。これは興味深い現象であるので、今後さらに追究したい。

注

- (1) 収集したデータの電子化および分析をおこなったコーパス分析システム Co-Chu の開発は、科学研究費基盤研究(C) 18K00723 (2018～2020年度 研究代表者:山本裕子)の支援を受けておこなわれた。コーパス分析システム Co-Chu については、山本他(2018)を参照されたい。
- (2) 脱落率が10%以上のところを網掛けで示し、脱落率が高いところが目立つようにした。表3以降も同様。

参考文献

- 佐藤豊(1999)「成人学習者による日本語の助詞習得を促すもの—文法機能が意味役割か—」『ICU日本語教育センター紀要』第8号, pp. 31-45.
- 丸山直子(2015)「助詞の使用実態—BCCWJ・CWJにみる分布—」第8回コーパス日本語学ワークショップ予稿集.
- 三原健一・平岩健(2006)『新日本語の統語構造』松柏社.
- 山本裕子・川村よし子・小森早江子・本間妙(2018)「話し言葉や誤用の含まれたテキストに対応可能なコーパス分析システムの開発」『2018年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp. 295-300. 日本語教育

学会.

Banno, E., and Komori, S. (1989). A study of Japanese acquisition order. *Proceedings of Hakuba Kaki Gengo Gakkai*, 4, 60-73.

Doi, T., and Yoshioka, K. (1990). Speech processing constraints on the acquisition of Japanese particles: Applying the Pienemann-Johnston Model to Japanese as a second language, Proceeding of the 1st conference on second language acquisition and teaching 1, 23-33, the International University of Japan.

Yagi, K. (1992). The accuracy order of Japanese particles, 『世界の日本語教育』第2号, pp. 15-25, 国際交流基金日本語国際センター.

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) (2011) https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/

(2020年4月21日 受理)